次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（①～⑧は段落の番号）

①「百聞は一見に如かず」ということばを聞いたことがあるだろうか。人から何度も話を聞くより、一度自分の目で見るほうがよくわかる、という意味である。このことばは、昔の中国の書物に書かれた文が、日本語のことばとして使われるようになったものだ。こうした昔の中国の文章を「漢文」という。

②漢文は、漢字だけで書かれている。もとの漢文は「百聞不如一見」の六字である。これを、そのまま上から順に読んでも、日本語として意味が通じない。中国のことばと日本のことばでは、ことばの並ぶ順番がちがうからだ。たとえば、私たちは「書を読む」と言うが、漢文では「読書」と書く。「読む」という動作を表す字が先に来て、何を読むのかを表す字があとに来るのである。

③［　A　］、昔の日本の人々は、漢文を日本語の順番に直して読むための工夫を考え出した。これを「訓読」という。訓読では、漢字の左下に、読む順番を示す「返り点」をつけ、右下に、日本語の読み方を補う「送り仮名」をカタカナでつける。こうして手を加えた文を「訓読文」、もとの漢字だけの文を「白文」とよぶ。

④返り点の中で、まず覚えたいのが「レ点」である。1レ点は、下の一字を読んでから、すぐ上の一字に返って読むことを示す。「読書（レ）」なら、「書」を先に読み、「読」に返って「書を読む」となる。

⑤二字以上はなれた字に返るときには、「一・二点」を使う。冒頭の文を訓読文にすると、次のようになる。

百聞（ハ）不如（カ）一見（ニ）
（レ二）（一）

返り点のない「百」「聞」を読み、次に「一」「見」と読む。一点のついた「見」まで読んだら、二点の「如」に返り、最後にレ点の「不」に返る。読む順番は「百→聞→一→見→如→不」である。

⑥訓読文を、日本語の文として書き直したものを「書き下し文」という。書き下し文では、送り仮名をひらがなにする。冒頭の文では、「百聞」の右下の「ハ」が「百聞は」の「は」に、「如」の右下の「カ」が「如か」の「か」に、「一見」の右下の「ニ」が「一見に」の「に」になる。送り仮名は、漢字と漢字をつなぐ日本語のことばを補っているのである。［　B　］、「不」のように、日本語の「ず」にあたる字も、ひらがなで書く。だから、「百聞は一見に如かず」となるのである。

⑦漢文の中には、訓読するときに読まない字もある。これを「置き字」という。たとえば、昔の中国の思想家、孔子（こうし）のことばを集めた『論語（ろんご）』に、次の文がある。

過（チテ）而不（ルヲ）改（メ）、是（コレ）謂（イフ）過（チト）矣
（レ）（レ）

書き下し文にすると「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ」となる。まちがえたのに改めないこと、これこそを本当のまちがいというのだ、という意味である。この文の「而」と「矣」は置き字なので、書き下し文には書かない。

⑧このように、訓読は、外国のことばで書かれた文章を、自分たちのことばの順番のまま読むための、すぐれた工夫である。この工夫があったからこそ、昔の中国の書物は多くの日本人に読まれ、2そこから生まれたことばが、今も私たちのくらしの中で生きている。「百聞は一見に如かず」のほかにも、「矛盾（むじゅん）」や「五十歩百歩」など、漢文から生まれたことばは数多い。漢文を読むことは、遠い昔の人々の知恵に、自分のことばでふれることなのである。

（創心館オリジナル文章）

問一［　A　］・［　B　］に入ることばとして最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　そこで　　ウ　また　　エ　たとえば

A □

B □

問二第②段落で、漢文の「読書」について、筆者はどのように説明しているか。次のaとbに入ることばを、第②段落からaは六字、bは十字で抜き出しなさい。

「読書」では、［a］が先に来て、［b］があとに来る。

a □

b □

問三次の訓読文を、返り点にしたがって読む順番に、漢字を書き並べなさい。

(1) 待友（レ）　(2) 入山中（二・一）　(3) 不見月（レ・レ）

(1) □

(2) □

(3) □

問四1レ点は、……示すとあるが、この読み方にしたがって、次の訓読文を書き下し文に直しなさい。

見（ル）花（ヲ）（レ）

□

問五第⑦段落の『論語』の文で、書き下し文に書かない字を、訓読文の中から二つ抜き出しなさい。また、そのような字を何というか。本文中のことばで答えなさい。

字 □

字 □

名前 □

問六本文の内容に合うものとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　漢文は、上から順番に読めば、そのまま日本語として意味が通じる。

イ　返り点は漢字の右下に、送り仮名は漢字の左下に、ひらがなでつける。

ウ　書き下し文では、送り仮名はカタカナのまま書く。

エ　「百聞不如一見」は、「百聞」を読んだあと、「一見」を読んでから「如」「不」に返る。

□

問七2そこから生まれたことばが、今も私たちのくらしの中で生きているとあるが、筆者は、なぜそうなったと述べているか。「順番」「工夫」という二つのことばを使って、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

解答（答えと短い解き方）

漢文の返り点・書き下し 標準① 訓読のしくみを説明した文章

本文の読解

問一 A　イ　　B　ウ

A：順番がちがうという問題のために訓読を考え出した→「そこで」。B：前のきまりに別のきまりを付け加えている。

問二 a　動作を表す字　　b　何を読むのかを表す字

第②段落の「『読む』という動作を表す字が先に来て、何を読むのかを表す字があとに来る」から抜き出す。

問三 （1）友待　（2）山中入　（3）月見不

レ点は一字下から返る。一点まで読んでから二点に返る。レ点が続くときは下から一字ずつ返る。

問四 花を見る

「花」を先に読み、レ点の「見」に返る。送り仮名の「ヲ」「ル」をひらがなにして「花を見る」。

問五 而・矣（順不同）　名前　置き字

第⑦段落に「この文の『而』と『矣』は置き字なので、書き下し文には書かない」とある。置き字は、訓読するときに読まない字。

問六 エ

第⑤段落に「読む順番は『百→聞→一→見→如→不』である」とある。

問七 （例）漢文を日本語の順番に直して読む訓読という工夫によって、昔の中国の書物が多くの日本人に読まれたから。

第⑧段落「この工夫があったからこそ……多くの日本人に読まれ」。「この工夫」＝訓読。